

## 2.1.プリント班概要

山田 慎也

初年度のプリント班では、それぞれが取り組む研究対象を定め、実際に着手していく中で、今後の展望も含め現状の成果を提示している。

山田慎也報告「作法書に見られる情報と社会層」では、冠婚葬祭といった儀礼は、人生の大きな節目として概して厳格に、そして臨時に実施されるものから、その知識に関しての伝承、獲得には細心の注意が払われ、多くの儀礼は関係者による口承、書承によってもその情報は伝えられてきた。とくに近代以降の印刷技術の高度な発達とともに社会環境の変化により、冠婚葬祭についても、それぞれが必要な情報を印刷刊行することで広く普及するようになった。なかでも葬送儀礼に関してみると、その情報の選択と提示の状況については、明治末期から次第に開示、刊行されるようになっていくことを指摘するとともに、そこで必要とされる情報について分析し、情報を求める社会層の性格と当時の背景について検討している。

大場あや報告「冠婚葬祭における衣装・用具・施設を「共有」すること-石川県旧能美郡の事例」では、冠婚葬祭互助会事業の成立にも大きな影響を及ぼした新生活運動について、地域における実際の展開を明らかにした上で、そこで実施された広報活動の実態を検討している。新生活運動について、儀礼の改廃にかかわるタイプを「廃止型」、公民館結婚式や貸衣装、共同葬具・祭壇の利用などの「共同型」に分類し、失敗と捉えられがちであった新生活運動について、「共同型」の観点から再評価を行った。その際、事業の展開として、情報を提供するための紙媒体やインターネット媒体などの製作による情報化の過程で、パッケージ化によって利便性が増す一方で、サービスの標準化、画一化、規格化が促進され、標準化がすすんでいったことも指摘している。

問芝志保報告「スピリチュアル系書籍に描かれた先祖観と墓参りの作法」では、スピリチュアル系の動向が情報化社会のもたらした宗教実践の一側面として宗教学では研究が進められていることから、これらの書籍が墓参りに関してどのように実践と意味づけを行っているかを検討している。それは執筆者も読者も、ある程度市場におけるニーズを意識しており、一定程度現代の社会的な動向を把握できるからである。これらの書籍では、墓参りに関して奇異と思われる実践も一部みられるが、多くの記述を通して、先祖供養や墓参りの意義とともに、墓参りの際により効果的な方法を知りたいと願うニーズの存在を把握でき、一般の人々の心性やニーズと乖離しているものではない可能性を指摘する。そして墓の維持継承が困難とされている現在、従来から見られる墓参りの意義が揺らいでいる中、開運や加護といった現世利益的な側面が強調され、家的な要素よりも個人の「幸せ」や「パワー」「金運」「浄化」などが強調され、墓がパワースポットとして位置づけられることを分析している。

玉川貴子報告「八事斎場再整備計画と八事霊園納骨堂における長期利用について」では、従来情報が一般にはあまり公開されることがなされなかった火葬場や納骨堂について、八事斎場と八事霊園納骨堂を取り上げ、そこでの現状を把握しようとするものである。八事斎

場では老朽化が進み、今後の火葬件数が増加する予測に伴って、再整備計画が立案されている。そこでは、炉前の「お別れ」をする火葬前の会葬者集団と火葬後の拾骨の会葬者集団との混雑が以前から指摘されているため、会葬者のプライバシー空間を確保できるような設計が計画されている。そして2065年以降は火葬件数の減少が予測されるため、それにも対処できるものとなっているという。また隣接する八事霊園納骨堂では、長期利用と短期利用の2種類があり、いずれも一時保管のためのもので、安価なため利用率もそれなりに高いが、返還率の変動もあり、この点については今後の検討の余地があるという。

土居浩報告「オンラインショップにみる葬祭領域の印刷物について」は、冠婚葬祭に関連する情報が流通する現在において、プリント班とインターネット班とのそれぞれが注目するメディア相互の関係性に留意し検討する必要があることから、この報告は双方の班を架橋する研究である。それは印刷物からオンラインへという経時的、直線的な変化だけでは捉えきれない情報研究の広がりを見いだすものでもある。まず実態を把握するため、鎌倉新書オンラインショップを事例として、両者の関係性を検討している。そこでは、オンラインショップで扱われる商品は、ほとんどが印刷物であることが判明した。それは葬儀社・霊園石材店・仏壇仏具店や寺院も包摂する「供養業界」向けの商品であり、一般消費者向けの物も業界を通して頒布される物であり、あくまでも対象は「供養業界」である点を指摘している。そしてこれらの営為が、ビジネス用語を使って葬祭に関する事象を把握しており、その限界を指摘するとともに今後ビジネス用語を適用する次元とは異なる語法が、「供養業界」にも必要であることを示唆している。

以上のように、冠婚葬祭と情報化の研究プロジェクトにおいて、とくにプリント班における多様な課題が見いだされ、研究にそれぞれ着手しており、来年度以降の展開が期待される。